

# 楓之典君乳母草子

日々は猫日々 其ノ玖

猫の妙術

中條 恵子 陸自85

「我知言。我善養吾浩然之氣」

「敢問、何謂浩然之氣」

曰、「難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。其爲氣也、配義與道。無是餒也。是集義所生者、非義襲而取之也。行有不慊於心則餒矣。」

（孟子）「私は（他者の）言葉の真意をよく理解する。私は己の浩然の氣をよく養っている」

（公孫丑）「あえてお伺いします。浩然の氣とは何でしょうか」

（孟子）曰く、「言葉にするのは難しいが、その氣は、至大にして至剛、正しく養い、損なわなければ、天地の間を塞ぐ。その氣は、義と道とに配されているものであり、これらがなければ、飢えてしまう。この氣は積み重ねた義によって自然に生ずるもので、義が外から取り込むというものではない。人が何かをなすに当

たり、心に疚しいことがあれば、たちまち飢えてしまう」

『孟子』卷3 公孫丑章句上

齡重ねて妖かしの猫又となる猫様の話は、徒然草に記されて以降各地に数多ありますが、お江戸には、武士の嗜みたる儒家・道家の教えを体現し、剣術の真髓ひいては人生の奥義を教示した古老の猫様がおられました。

## ○ 猫の妙術

『猫の妙術』は、江戸時代前中期の下総関宿藩士・佚斎樗山（1659・1741年 本名・丹羽十郎右衛門忠明）著『田舎莊子』（享保12年（1727年）の一話です。

猫達と古猫の間答で、剣術の技・氣・心のあり方を説き、「事理一致」「自得」などについて語り、至人もなれば、敵は生じず、周囲にも現れないと締めくくります。

孟子の「浩然の氣」、莊子の「木鶏」になぞらえた「木猫」の話など、四書五経・老莊思想を引用しながら、太平の世、武芸者の質も落ちた時代に平易に説かれた剣術指南書で、猫様御用達の浮世絵師・歌川国芳も版画「猫の妙術」を物しています。

それでは、古猫殿の妙術をご紹介します。

● 大鼠出現。猫達太刀打ちできず

勝軒という剣術者がおりました。その家に大鼠が出て、白昼に座敷を駆け回ります。主の勝軒はその部屋を閉て切り、手飼いの猫に鼠を捕らせようといたします。ところが、この鼠は前に出でて、猫の顔に飛び掛かって食らい付いたので、猫は鳴き声をあげて逃げ去ってしまいました。

これは手に負えないと、近在で鼠取りの名手と呼ばれる猫たちを借り集め、かの部屋に追い入れたのですが、鼠は床の隅にじっとして、猫が来れば飛び掛かりて食い付き、その殺氣がすさまじく見えたれば、猫達は皆尻込みして動きません。

● 主の剣術も通じず

主の勝軒は、腹を立てて自ら木刀を持ち出し、鼠を打ち殺そうと追い回しましたが、鼠は手元から抜け出て、木刀に当たりません。そここの戸・障子・唐紙などを皆叩き破れども、鼠は空を飛び、その早きこと稲光が走るがごとし。やもすれば、主の顔面に飛び掛かり、食い付かんばかりの勢いであります。

● 古猫殿 難無く鼠を捉まえる

勝軒は大汗を流し、下僕を呼んで申し付けます。「ここから六、七町先に、類い稀な優れ者の猫がいると聞いておる、借りて参れ」

すぐさま人を遣わしてその猫を連れて来てみると、その様子は賢そうにも見えず、さほど活発な猫にも見えません。

「其奴をまず鼠のいる部屋に追い入れてみよ」というので、少し戸を開けその猫を入れてみると、鼠はすくんで動きません。猫は何事もなくのろのろと進んで、鼠を引きくわえて参りました。

● 猫の衆、古猫殿に教えを乞う

その夜、鼠を取り損なつた猫どもが勝軒の家に集まって、かの古猫を上座に招き、いずれも跪いて、「私どもは鼠取りの名手と呼ばれ、その道に修練し、鼠ばかりか鼯や獺までも取り拉ごうと爪を研いでおりましたところ、未だこのような強い鼠がいることを存じませんでした。御身は、いかなる術を以て容易くあの鼠を服従させられたのでしょうか。何卒、惜しむことなく貴公の妙術をご教示下され」と、謹んで申します。

古猫は笑って言います。「いずれ

もお若き猫の衆、懸命にお働きなされたが、未だ正しい鼠取りの法をお聞きになつておらぬが故に、想定外のことにあつて不覚を取られた。しかしながら、まずは各々方の修業のほどをお伺いたさう」と。

● 黒猫、技のみにて理を知らず

中から、機敏そうな黒猫が一匹進み出て、

「私は代々鼠取りの家に生まれ、その道に心がけましたので、七尺の屏風を飛び越え、小さき穴もくぐり、子猫の頃より、早業・軽業でできないということがありませぬ。ある時は寝たふりをし、またある時は不意をつき、家の梁・桁を走る鼠であらうとも取り損じたことはございませぬ。しかれども、今日は思いも寄らぬ強い鼠に出会い、一生の後れを取り、心外の至りにございます」と申します。

古猫が言うことには、

「ああ、お主が修めたのは、技法のみ。それ故に、未だ狙う欲心があることから免れられぬのだ。先人が技法を教えたのは、欲心から自由になる道筋を知らしめんがため。よつて、その技法というものは、単純で容易く、その中に究極の理りを含ん

でいるのだ。

後世、技法を専らとして、どうかすると、色々なことをこしらえ技巧を極め、先人を軽んじて機知を用い、果ては技法比べということとなり、その技巧も尽きて如何ともしがた

い。

つまらぬ者が技法を極め、機知を専らとするなど、皆かくのごとくである。技法は心の作用なりといえども、正しい道に基づかずただ技巧を専らとするばかりでは偽りの道に陥る端緒となり、かような機知は却つて害になることが多い。これをもつて反省し、よくよく工夫すべきであらう」

● 虎猫の氣、豁達至剛なるも浩然の氣にあらず

また、虎毛の大猫が一匹まかり出て、こう申しました。

「私が思いまするに、武術は氣のありようを尊びます。故に、私は久しく氣を錬成して参りました。今やその氣は豁達至剛にして、天地に満ちるがごとし。

氣によりて敵を脚下に踏みつけ、まず勝ちを取りて、その後には捕らえます。声に従い、響きに応じて、鼠が左右どちらにしようともその変

化に應じられないことはござらぬ。技法に心を用いなければ、技は自ずから湧き出するもの。梁・桁を走る鼠は、にらみ落としてこれを捕りま

する。

古猫が言うことには、

「お主が修練したのは、氣の勢いに乗じて、働くもの。それは自ら

自信を頼みとしなければ成り立たず、最善のものにあらず。我が敵の氣を撃ち破つていこうとすれば、敵もまた破ろうとする。また、破ろうにも破れない者がある時は如何とす。我が敵の氣を覆つて挫かんとすれば、敵もまた覆つて来る。覆おうにも覆えない者があるときは如何。どうして、我のみが強く敵はみな弱い、などということがあろうか。

豁達至剛にして天地に満ちるよう

同じではない。滔々と流れる大河の勢いと一夜限りの洪水の勢いのごとし。その氣勢に屈しない者があれば如何にする。

窮鼠却つて猫を噛むということがある。それは必死に迫つて己を頼みにすることがない。命を忘れ、欲を忘れ、勝負をも思わず、その身を全うしようという心もない。故に、その意志たるや金鉄のごとし。かような者を、どうして氣の勢いで破ることができようか」

以下次号

○ 楓之典君のつぶやき

——先々代ちやら爺殿は、齡経て人語を一節発し、猫神様の下へ修行に旅立たれた逸物也——

歌川国芳『猫の妙術』…東京都中央図書館所蔵

